

trivia ■皮膚科のトリビア■ 150

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで見聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

laboratory animal allergy (LAA)

第869回日本皮膚科学会東京地方会から(平成28年11月19日)

マウス、ラットなどの動物を扱う実験助手に生じる即時型アレルギーをLAAと呼ぶ。40歳代女性で勤務歴は1年。既往歴はないがマウス咬創後に全身に膨疹が出現し、咳嗽を伴った。マウスの特異的IgE抗体陽性、ラット唾液のプリックテスト陽性。LAAは多くの症例が勤務歴3年以内に発症している。アナフィラキシー、蕁麻疹のほか、結膜炎、鼻炎、喘息など症状は多岐にわたる。労働衛生上の管理が必要である。各動物の主要なアレルゲンは以下の通り。マウス：Mus m 1 (prealbumin) /尿・毛・フケ、ラット：Rat n 1A (alpha-2 globulin) /尿・毛・フケ、モルモット：Cav p 1 /毛・フケ・尿、ウサギ：Ory c 1 /毛・フケ・唾液、ネコ：Fel d 1 /毛・フケ・唾液、イヌ：Can f 1 /毛・フケ・唾液。[lipocalinという、疎水性の脂質などを輸送する糖タンパクが多く動物アレルギーに関連しているらしい]。

扁平苔癬にインターナル内服が有効

第869回日本皮膚科学会東京地方会から(平成28年11月19日)

50歳代女性。左前腕にBlaschko線に沿って線状に連なる扁平苔癬。薬剤の内服歴は

なし。金属パッチテストでニッケルとコバルトが陽性。歯科治療後のクラウンあり。インターナルの内服を開始したところ、発疹は消失した。

「全身性金属アレルギーが病態として深く関わっている皮膚疾患にインターナル内服が有効な場合があることを思い出した。今度使ってみよう」。

ステロイド軟膏外用による proactive 療法の評価

第52回横浜北部皮膚科臨床懇話会から(平成28年12月1日)

症状が落ち着いている成人アトピー性皮膚炎患者に対し、P群(アンテベート軟膏週2回、1日2回外用+保湿剤を連日1日2回外用)とC群(保湿剤連日1日2回外用)に分け、治療開始8週後の皮膚症状スコア、VAS、DLQIを評価した。P群はいずれも改善、C群ではいずれも悪化した。両群の炎症収束維持率を比較検討したところ、P群はC群に比べて有意に高く、約70%の症例で60日以上維持しえた。

「炎症収束維持率とは、一群の中で症状の悪化がなく、現状維持が続いている人数の割合とすることで、再発率の裏返しということ。初めて聞いた言葉だった。ちなみに、タクロリムスのproactiveは納得がいくが、ステロイド軟膏のproactiveはなんとなく不安である」。

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

telangiectatic photoagingと酒皸の違い

神奈川県皮膚科医会第152回例会から (平成28年12月4日)

telangiectatic photoaging (TP) と毛細血管拡張性酒皸とは区別されるべきである。酒皸ではflashingがあり、血管拡張はやや少なめである。TPはflashingがなく、紫外線による皮膚萎縮、色素斑、脱色素斑を伴う。病理組織でも光線によるダメージが強く現れ、MMP-3の遺伝子発現が酒皸に比べて1/4程度と低い。

「確かに、顔面に毛細血管拡張だけがあり、ステロイド外用の副作用かと思ったが外用歴がない患者がいる。炎症もないので、酒皸とは違う診断をつけることに賛同したい」。

断してきた疾患のようだ。一応、名前だけは覚えておこう」。

褥瘡にCP10

平塚市医師会講演会から (平成28年12月13日)

collagen di-peptideを10g含有するゼリータイプの栄養剤。褥瘡患者に使用したところ、コントロールと比べdesignの改善が有意に高かった。総蛋白量などの生化学的検査では変動なし。褥瘡患者の栄養剤として補助的に用いるとよい。

「ペプチドであるということが、いわゆる栄養剤としてのコラーゲンとの違いらしい。評価がむずかしい領域ではあるが、説得力があった」。

Morbihan's diseaseとは

神奈川県皮膚科医会第152回例会から (平成28年12月4日)

額、上眼瞼、眉間、鼻、両頬に生じるnon-pitting edemaで、酒皸の合併症と考えられている。自覚症状はないが、上眼瞼に生じた場合は視野狭窄をきたすことがある。リンパ浮腫に端を発する慢性の炎症で、病理組織学的にも肉芽腫性炎症を示す。肥満細胞の増加も指摘されていて、治療はミノサイクリンの長期投与が比較的有效である。

「浮腫結合性肉芽腫、肉芽腫性眼瞼炎と診

